

# 近世妙心寺派における頂相制作の一例

— 水谷憬南・中天景団の作例 —

花園大学歴史博物館研究員

志 水 一 行

はじめに—これまでの妙心寺派における頂相の研究—

全国に三四〇〇ヶ寺余りの末寺を有する妙心寺。応燈関一流として、妙心寺開山・関山慧玄（一二七七一—一三六一）の法灯が妙心寺をはじめその末寺にて堅持されている。

去る二〇〇九年、妙心寺開山無相大師（関山慧玄）六五〇年遠諱大法会が厳修され、遠諱を記念して妙心寺の永い歴史のなかで蓄積された文化財の数々を紹介する展覧会が開催された。会場は、東京国立博物館および京都国立博物館のほか、名古屋市博物館<sup>②</sup>、九州国立博物館<sup>③</sup>であり、妙心寺のみならず東北から沖縄までいたる妙心寺派寺院の寺宝が展観された。各館が所在する地域における妙心寺派の展開とともに、寺宝の数々が紹介され、多くの人々が関山禪と妙心寺派寺院の文化財を知るところとなった。

こうした文化財を概観したとき、多彩な文化財のなかでも、肖像画の優品が数多く遺されていることに気

付かされる。戦国期以降、時の有力者を迎えて寺勢の発展を遂げてきた妙心寺派においては、それを支えた外護者の肖像画が多く伝来している。したがって、妙心寺派寺院は「肖像画の宝庫」とも言えよう。しかし、それ以上に数を上回るのが、祖師のすがたを描いた頂相である。妙心寺派寺院に限らず、師資相承を重んじる禅宗寺院では、歴世の頂相が最も重要なものとして大切に遺されている。

これらの頂相のなかには、肖像画と同様、当時の画壇において名を馳せた絵師たちが描いている作品もある。例をあげるならば、狩野元信筆「鄧林宗棟像」(自賛、京都府京都市・龍安寺)<sup>4</sup>や狩野探幽筆「愚堂東寔像」(自賛、岐阜県加茂郡八百津町・大仙寺)<sup>5</sup>などであり、このほか、狩野派絵師の作と目されている頂相も少なくない。

しかし、これらの作品は近世初頭までに制作された頂相であり、それ以降に制作された頂相が紹介される機会は少ない。近年においては、木村了琢<sup>6</sup>と同じく木村姓を名乗った近世絵仏師の徳応や、その後継者と推測される貞綱(徳栄)らによる頂相の存在が知られるところとなった。徳応と貞綱(徳栄)においては、秋山光和氏および樋口智之氏、渡邊雄二氏をはじめとする先学の精緻な研究によって、臨濟宗寺院のほか黄檗宗寺院にて多数の遺作が確認されており、ことに妙心寺派・大徳寺派寺院での制作が目立つ。その活動範囲は全国各地におよび、両者ともに一般的な仏画を描くほか、頂相の遺作が圧倒的に多いことに注目される。

とはいえ、近世における頂相研究はいまだ等閑視されている状況にあるようにおもわれる。近世に入って著しい発展を遂げ、寺勢の拡大をみる妙心寺派。その歴史ゆえ、近世に制作された頂相が圧倒的に多く、近世妙心寺派をめぐる美術を考える上では、頂相の研究が重要な課題のひとつに位置付けられる。さらに、近世の頂相研究が当該期の妙心寺派の動向と、全国に張り巡らされたネットワークの解明の糸口となる可能性を秘めていると論者は考えている。

本稿においては、妙心寺派内のネットワークの存在を示唆する一例として、妙心寺派寺院にて頂相制作を行っていた二人の絵師をとりあげたい。その名は「水谷憬南」と「中天景団」。論者は、これまでに全国数ヶ寺の妙心寺派寺院を対象とした文化財調査の機会を得ることができた。その調査では、決まって「水谷憬南」と「中天景団」という人物が描いた頂相に出会う。はじめは「水谷憬南」と「中天景団」という頂相画家の存在を知るとどまつたが、数点の作例に出会うなかにおいて、地域性にとらわれない、近世妙心寺派寺院における頂相制作の一面を目の当たりにしたようにおもえた。「水谷憬南」と「中天景団」の存在が近世頂相研究に新たな視点を与えることを期待し、ここに二人の作例を紹介したい。

なお、本稿においては、可能な限り作品詳細データの記載を心がけたものの、紙面の都合上、すべての作品の図版を掲載できなかった。したがって、《注》にて各作品の図版所載を明記したので参照いただきたい。本稿末尾には、論者が調査することができた作品のうち、これまでにカラー図版にて紹介されていない作品の図版を掲載した。

### 水谷憬南の作例

これまで、妙心寺派寺院の調査において、「憬南」印が捺される頂相を数点見出すことができた。この印をとともなう頂相からは、絵師としての高い技術をうかがうことができ、近世における多くの頂相のなかにあつて一際目を引く作例ばかりである。論者がこれまでに確認することができた作例は九点であり、このうち七点において詳細な調査の機会を得ることができた。ここに九点の作例を列挙する。

【水谷憬南作品リスト】

No.	作品名称	賛者等	員数	品質	分量 (cm)	時代	所蔵
①	亮山恵林像	自賛	一幅			元文二年 (二七三七)	大徳寺 (滋賀県東近江市)
②	頑海慈海像	自賛	一幅	絹本着色	縦 九三・七 横 二七・五	明和二年 (二七六五)	麟祥院 (東京都文京区)
③	芳山祖海像	普山祖宰賛	一幅	絹本着色	縦 一一五・八 横 五〇・六	明和四年 (二七六七)	大仙寺 (岐阜県加茂郡八百津町)
④	古月禅材像	翠巖従真賛	一幅	絹本着色	縦 八七・〇 横 三二・一	明和七年 (二七七〇)	福聚寺 (福岡県久留米市)
⑤	安禅宜泰像	普山祖宰賛	一幅	紙本着色	縦 一〇四・二 横 四三・九	明和七年 (二七七〇)	大勝寺 (岐阜県大垣市)
⑥	東嶺圓慈像	自賛	一幅	絹本着色	縦 六七・八 横 二五・五	明和八年 (二七七二)	龍澤寺 (静岡県三島市)
⑦	千巖祖鈞像	東嶺圓慈賛	一幅	絹本着色	縦 九九・三 横 四五・三	江戸時代 (十八世紀)	齡仙寺 (滋賀県東近江市)
⑧	昊巖義喬像	東嶺圓慈賛	一幅	絹本着色	縦 一〇九・八 横 四六・二	江戸時代 (十八世紀)	齡仙寺 (滋賀県東近江市)
⑨	古林義発像	月船禅慧賛	一幅	紙本着色	縦 一〇二・一 横 四二・〇	江戸時代 (十八世紀)	恵林寺 (山梨県甲州市)

① 亮山恵林像<sup>8)</sup>

自賛 水谷憬南筆 一幅

江戸時代 元文二年 (一七三七)

大德寺（滋賀県東近江市）

〔贊文〕

看通身泥水

是什麼標致

手裏黑蚯蚓

腥風捲大地

阿呵々

是非既落傍人耳

洗到無塵還不是

喝

元文二歲丁巳善之孟

寓大德林亮山自題

② 頑海慈湛像<sup>9</sup>

自贊 水谷憬南筆 一幅

絹本着色

縱 九三・七cm 橫 二七・五cm

江戸時代 明和二年（一七六五）

麟祥院（東京都文京区）

印章——「水谷法橋」（朱文方印）・「憬南」（白文方印）

〔贊文〕

〔仏心宗〕白文楷印

這瞎痴頑有頭無腦施与你者不名福田

供養你者墮三惡道可謂仏法中大罪人

苟不自讚謹顧醜老 皆

明和乙酉仲夏天沢八世六十二翁湛頑海

書以心于具寿効桂需〔不徂軒〕白文方印〔湛頑海〕朱文方印

③芳山祖海像<sup>10</sup>

普山祖宰贊 水谷憬南筆 一幅

絹本着色

縦 一一五・八cm 横 五〇・六cm

江戸時代 明和四年（一七六七）

大仙寺（岐阜県加茂郡八百津町）

款記―「法橋水谷憬南画」

印章―「水谷法橋」（朱文方印）・「憬南」（白文方印）

〔贊文〕

〔臨濟正宗〕朱文楷印

大仙芳老和尚之寿像成矣

時以寢疾不及贊之既示寂云

近令嗣康林寧禪師遠來就余  
請贊余与芳和尚非啻宗盟亦  
有旧交之親誼不可辭遂為之

贊曰

再住法山德沢溢海久董大仙

真儀如在勿謂丹青画不成温乎

面目有光彩

岿

明和丁亥建辰之月

賜紫沙門普山叟祖宰謹贊于

慈溪笏室〔祖宰之印〕〔白文方印〕〔替山人〕〔朱文方印〕

④古月禪材像<sup>1)</sup>

翠巖從真贊 水谷憬南筆 一幅

絹本着色

縱 八七・〇 cm 横 三三・一 cm

江戸時代 明和七年（一七七〇）

福聚寺（福岡県久留米市）

印章―「水谷法橋」（朱文方印）・「憬南」（白文方印）

〔贊文〕

〔印文不明〕朱文橢圓印

慳吾三頓旧冤讎

慚汗昔時浹背隊

咄

濫鎮解脫幾千秋

明和七季八月十七日的嗣小師淺水菴翁

八十八從真翠巖和南焚香拜贊〔翠巖〕白文方印〔從真之印〕朱文方印

⑤安禪宜泰像 普山祖宰贊 水谷憬南筆 一幅

紙本着色

縱一〇四・二cm 橫四三・九cm

江戸時代 明和七年（一七七〇）

大勝寺（岐阜県大垣市）

印章―「水谷法橋」（朱文方印）・「憬南」（白文方印）

〔贊文〕

〔臨濟正宗〕朱文橢圓印

前大勝安禪泰禪師之肖像成矣

令嗣轉幽実公就余請贊余不

忍辭遂為之贊贊曰



安禪不動身意

泰然 咄

謹知轉処実能

幽玄

皆

明和七年庚寅之秋八月初三

三住妙心普山叟祖宰謹賛于

慈溪之笏室

〔釈氏祖宰〕朱文方印 〔普山之印〕白文方印

⑥ 東嶺圓慈像<sup>13</sup>

絹本着色

縦六七・八cm 横二五・五cm

江戸時代 明和八年（一七七二）

龍澤寺（静岡県三島市）

印章―「水谷法橋」（朱文方印）・「憬南」（白文方印）

〔賛文〕

〔澆池逆水〕朱文橢円印

臨濟宝剣磨来隠東

山嶺雲門古曲奏成

睡南浦春

元啓居士函予幻質來請

贊仍加一語以示具隻

眼底漢

明和八年辛卯二月日龍澤東嶺頭佗書（花押）（東嶺）朱文円印（圓慈）白文円印

⑦千巖祖鈞像<sup>註</sup>

東嶺圓慈贊 水谷憬南筆 一幅

絹本着色

縱九九・三cm 横四五・三cm

江戸時代（十八世紀）

齡仙寺（滋賀県東近江市）

印章—「水谷法橋」（朱文方印）・「憬南」（白文方印）

〔贊文〕

（「雲門臨濟百華之春」白文長方印）

天月地水

一鈞千巖

開禪薩摩

捨化齡僊

是日前住無量後住雲山  
岩老和尚歟堂々面目誰

敢摸索 咄

德山老人円慈謹贊（花押）〔圓慈〕白文方印〔東嶺〕朱文方印

⑧ 吳巖義喬像<sup>15</sup>

東嶺圓慈贊 水谷憬南筆 一幅  
絹本着色

縱一〇九・八cm 橫四六・二cm

江戸時代（十八世紀）

齡仙寺（滋賀県東近江市）

印章―「水谷」（白文円印）・「憬南」（朱文方印）

〔贊文〕

〔雲門臨濟百華之春〕白文長方印

駿南清水英産

江国独照嗣師

一箇吳岩擬難

依禪不依義伊

東嶺敬題（花押）〔圓慈〕白文方印〔東嶺〕朱文方印

⑨ 古林義發像<sup>16</sup>

月船禪慧贊 水谷憬南筆 一幅

紙本着色

縱 一〇二・一 cm 橫 四二・〇 cm

江戸時代（十八世紀）

山梨県甲州市・惠林寺

印章―「水谷法橋」（朱文方印）・「憬南」（白文方印）

〔贊文〕

〔華亭〕朱文長方印）

乾德不氣

仏徳非心

一華發明

千古祇林

醍醐為毒

瓦礫作金

龜毛弘備一種平惺之掌

兔角杖桃方法不到之陰

曾彼是前当山古林發大和尚麼

笛水波證存乳源

東輝菴月船禪慧拜讚

これら「憬南」(白文方印)を捺す作品は、「水谷法橋」(朱文方印)もしくは「水谷」(白文方印)をともなう。  
②「頑海慈湛像」・③「芳山祖海像」・④「古月禅材像」・⑤「安禅宜泰像」・⑥「東嶺圓慈像」・⑦「千巖祖鈞像」・⑧「古林義発像」に「水谷法橋」(朱文方印)が捺され、⑧「吳巖義喬像」のみに「水谷」(白文方印)と「憬南」(朱文方印)が認められる。なお、使用印は「水谷法橋」(朱文方印)四種、「水谷」(白文方印)一種、「憬南」(白文方印)三種、「憬南」(朱文方印)一種に分類できそうである。

これらの印文により、九点の頂相を描いたのは「水谷憬南」なる絵師と推測できる。しかし、近世における画史・画伝類には水谷憬南の名を見出すことができない。その一方で、白隠慧鶴(一六八六～一七六九)門下のひとり東嶺圓慈(静岡県三島市・龍澤寺二世、一七二一～九二)の年譜である『龍澤創建東嶺慈老和尚年譜』(京都府亀岡市・法常寺)<sup>17</sup>に「水谷憬南」の名が登場する。同書は東嶺法嗣の大観文珠(京都府亀岡市・法常寺一〇世、一七六六～一八四二)よつてまとめられたものであり、享保十九年(一七三四)条に「画師水谷憬南」の名がみえる。

〔享保十九年(一七三四)条〕

同十九年、甲寅。

師歳十四。亮山和尚、因事登華園。師嘗念、写受業之真懷行止。此時欲待行儀山不敢許。乃詐曰、我欲上京師求九經、請今誘我。山復止之。師強而請。遂聽隨之。先上京師、倡山到画師水谷憬南之宅、令憬南写亮山之寿真。山旋、言師于求九經。師曰我已得師之真我事畢。山聞默然。惟師未及志学殆有老成之籌策。

同書によれば、大徳寺（滋賀県東近江市）にあった東嶺圓慈は、受業の師である亮山恵林（大徳寺四世、？～一七五〇）が花園妙心寺に登るのに際して、亮山に随行することを請うた。初めは断られるものの、ついに許しを得て亮山に随い上京した。この折りに画師水谷憬南のもとへ赴き、かねてより望んでいた憬南の寿像を描かせたという。このとき東嶺は十四歳。はたして、まだ十四歳であった東嶺がこのような行動をとるのか疑問が残るものの、この記事により、水谷憬南は京都に居を構え、同地を拠点に活躍していたことがうかがえる。さらに、現存作品が関東地方から九州地方まで全国各地に伝わることからして、広範囲から制作の依頼を受ける妙心寺派の中心的な頂相画家であったものとおもわれる。

その活躍期は、賛文に年記を有する現存作例から判断するに、上限が①「亮山恵林像」の元文二年（二七三七）、下限が⑥「東嶺圓慈像」の明暦八年（一七七二）となる。その他、『龍澤創建東嶺慈老和尚年譜』の記述および、像主の生没年もしくは活躍期を勘案した場合、十八世紀頃と推測できよう。なお、東嶺圓慈が①「亮山恵林像」を描かせてから三十四年後に、自身の頂相である⑥「東嶺圓慈像」に賛文を賦している。さらに、着賛時期は詳らかでないものの、東嶺は⑦「千巖祖鈞像」と⑧「吳巖義喬像」にも着賛している。したがって、水谷憬南と東嶺は長期にわたり密接な関係があったようである。⑥「東嶺圓慈像」が蔵されている龍澤寺は、東嶺が白隠の命にて創建に尽力した禅刹であり、⑦「千巖祖鈞像」と⑧「吳巖義喬像」は、東嶺示寂の地である故郷の齡仙寺に伝来する。東奔西走し教化につとめた東嶺。数多くの由緒寺院がその足跡を伝えるが、龍澤寺と齡仙寺はそのなかにあつて、東嶺の生涯を代表する二ヶ寺である。このような両寺に水谷憬南と東嶺を結ぶ作例が遺ることからしても、水谷憬南と東嶺が深い関係を有していたことが裏付けられよう。

現存作例をみるに、その像容は、法被を掛けた曲糸に坐し、手には竹篋あるいは払子を執る。また、拄杖

を傍らに立て掛けるものも見うけられ、頂相制作の通例の形式に倣って描かれる。これら九点のうち、②「頑海茲湛像」・④「古月禅材像」・⑤「安禅宜泰像」が円相中に半身を描いた円相像であり、この種の頂相も得意としたものとおもわれる。

いずれの作例からも、法被や袈裟の描写が微細であるとともに、像全体を通しての人体表現をはじめとする立体感の把握も的確であり、職業画家としての高い画技がうかがえる。ことに、③「芳山祖海像」・⑨「古林義発像」は、緻密な筆致に加え、顔料および金泥を惜しみなく用いて彩色を施すなど、憬南の意気込みを看取することができる。

### 中天景団の作例

水谷憬南と同様に、近世における妙心寺派寺院にて頂相を制作している人物がいる。その人物が描く頂相には「景団」（白文方印）が捺され、あるいは「中天」（朱文方印）をともなう。これまでに確認することができた頂相作例は三点である。この人物の特徴として、水谷憬南の場合とは異なり、頂相以外の作例をも見出すことができた。論者が確認・調査することができた五点の作例を列挙する。

【中天景団作品リスト】

No.	作品名称	賛者等	員数	品質	法量	時代	所蔵
①	淡道宗廉像	寧山良泰賛	一幅	絹本着色	縦一・三・〇 横 五・一・二	宝永三年 (一七〇六)	大法院 (京都府京都市)
②	関山慧玄像	黙雲禪宜賛	一幅	絹本着色	縦一・四・八 横 五・七・三	正徳五年 (一七一五)	妙心寺 (京都府京都市)
③	東法純季像	古月禪材賛	一幅	絹本着色	縦一・四・〇 横 五・七・四	享保十一年 (一七二六)	惠林寺 (山梨県甲州市)
④	布袋図	良哉元明賛	一幅	紙本着色	縦 九・二・四 横 二・八・四	江戸時代 (十八世紀)	花岳寺 (愛知県西尾市)
⑤	四睡図		一幅	紙本墨画 淡彩	縦 六・三・四 横 一・九・〇	江戸時代 (十七、十八世紀)	麟祥院 (京都府京都市)

① 淡道宗廉像<sup>18)</sup> 寧山良泰賛 中天景団筆 一幅  
絹本着色

縦 一・三・〇 cm 横 五・一・二 cm

江戸時代 宝永三年(一七〇六)

大法院(京都府京都市)

款記―「中天埜柄拝筆」

印章―「景団」(白文方印)・「中天」(朱文方印)

「賛文」



資始大法 荷担正宗

曹溪滴水 万歲小峯

拈白毫弘 著金裁縫

仏魔俱打 還老凍膿

此是大法創建前住当山淡道廉和尚之

肖像也小師祖桂首座描焉于時老拙

住法山以故為幸請贊以与首座相識

不忍拒辭執觚於見麼軒下

宝永三丙戌季夏十二日

現住正法尾陽政秀主宰泰寧山謹贊

〔寧山〕朱文方印 〔良泰〕白文外郭付方印

② 関山慧玄像<sup>19)</sup>

默雲禪宜贊 中天景団筆 一幅

絹本着色

縦 一一四・八cm 横 五七・三cm

江戸時代 正徳五年（一七一五）

妙心寺（京都府京都市）

印章——「景団」（白文方印）・「中天」（朱文方印）

「贊文」

這老和尚者

龍宝開山師国師之上足也

文保天皇在位後居 花園離宮時 国師示微恙 上皇

遣勅使 詔曰 国師今付大法者既是多其内誰是尤得

大機大用者須承的旨 朕曾參 国師禪雖得大休謁旨

未敢能發轉格外之玄機 国師百年後猶敲其奧 国師

云有慧玄藏主者老漢室中所接出第一神足也実承当得

松源之骨髓矣天然以風顛故居処不定吾滅後宜尋出

以商略向上宗乘也 上皇復詔国師曰 朕捨離宮欲為

禪宮伏賜山号寺号特請 関山以令為住持 国師即応

詔山云正法名寺妙心蓋以準梵王昔献花日大迦葉破

顔之故事亦所以請師兄貴正脈者也 勅使環奏 上皇

上皇大悦也 国師入滅後 上皇遣使請斯 和尚於濃

之山村住本山參徒亦隨至室内只棒雨喝雷耳於此 上

皇亦山中翔 玉鳳院而居之以旦夕鍛鍊 睿信增厚竟

為 開山祖住世八十四年間開作家鑪鞴下惡辣鉗錘底

大宗匠也臨示寂囑嗣法的子彌授翁曰吾溘然後汝專以

本分事接四來衲子而合振起 林際正宗切莫写余頂相

授翁謹任遺囑所以 開山祖塔号微笑塔中只建牌也

滅後七十年後第四世嫡孫 舜日峰住院到再興斯寺時  
謂諸徒曰吾祖禁頂相遺囑一代奇範也雖然末代兒孫以  
甚為憑拋但須命画師令図大方尊宿之体裁也況其仏与  
菩薩形像何敢憑其模範以為必哉須是以相好甚嚴為最  
也今拗曲彙握竹篔簹凜然威風逼來学之 尊像者從嫡孫  
自由三昧心現矣夫斯之謂 妙心開山関山和尚者也哉  
皆文明二稔龍集庚寅孟秋日正法山主拙孫比丘宗深焚  
香九拜謹記 祖師大略云是皆門下老宿所語可謂揚家  
醜也 正徳五年乙未李夏日 現四住当山默雲禪宜  
焚香九拜謹写于見麼軒

〔禪宜〕朱文壺形印 〔默雲〕白文方印

③東法純季像<sup>20</sup> 古月禪材賛 中天景団筆 一幅  
絹本着色

縦 一一四・〇cm 横 五七・四cm

江戸時代 享保十一年（一七二六）

恵林寺（山梨県甲州市）

印章―「雪獅叟印」（朱文方印）・「景団」（白文方印）

〔賛文〕

〔臨濟正宗〕朱文楕円印

得荆阜玉 秘在掌中

智優才脈 臘高德豐

兵災銷尽 仏宇紹隆

榮賜甚服 長裏祖風

享保十一年丙午結冬会採

筆於奚疑軒書

古月禪材稽顙九礼（禪材之印）白文方印（知又古月）朱文方印

④布袋図<sup>2)</sup>

良哉元明像 中天景团筆 一幅

紙本着色

縦 九二・四 cm 横 二八・四 cm

江戸時代（十八世紀）

花岳寺（愛知県西尾市）

款記―「中天筆」

印章―「景团」（白文方印）

「賛文」

〔華岳連團碧〕白文長方印

脚脱芒鞋

頭戴布袋

一住躑跳

這老襪襪

雲山良哉贊

〔元明〕白文方印〔良哉〕朱文方印

⑤ 四睡図<sup>(22)</sup> 中天景団筆 一幅

紙本墨画淡彩

縦 六三・四 cm 横 一一九・〇 cm

江戸時代（十七〜十八世紀）

麟祥院（京都府京都市）

款記―「山月堂」

印章―「景団」（白文方印）

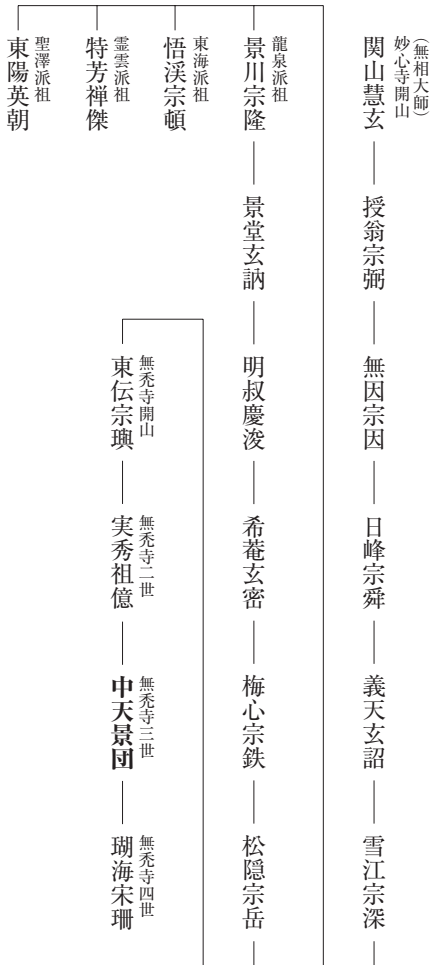
これら五点すべてに「景団」（白文方印）が捺され、①「淡道宗廉像」および②「関山慧玄像」は「中天」（朱文方印）をともなう。水谷憬南と同様、「景団」および「中天」は聞き慣れない印文であるものの、①「淡道宗廉像」の款記に「中天埜衲拜筆」とあり、僧侶、なかでも禅僧である可能性が浮上する。そこで、妙心寺関係資料をひもとくと、龍泉派下景堂門派に「中天景団」の名が確認でき、興福山無禿寺（愛知県岡崎市）に住した妙心寺派僧であることを知る<sup>(23)</sup>。

無禿寺の『寺籍調査票』<sup>(24)</sup>によれば、開創由緒は「明暦元年（二六五五）開創。開山東伝宗嶼禅師・開基細

井佐吾平。当山は、明暦元年四月十二日開基細井佐吾平の創立にして東伝宗嶼禪師を請じて開山となす。明治四十二年八月中興開山第十一代大兼儀察和尚に依りて本堂再建爾来今日に及ぶ」といふ。なお、中天景団は無禿寺三世であつたようである。

さらに、妙心寺紀綱寮にて録された妙心寺前堂籍者名簿『正法山妙心禪寺前堂耆旧牒』(二十一卷、妙心寺<sup>25)</sup>には、四派小派・師承關係・転位年月日が記されており、同書の中天景団の項に「実秀億嗣 元禄五年四月十五日」と記載されている。中天景団は実秀祖億(無禿寺二世)の法嗣であり、無禿寺の住持職も師から嗣いでいる。

【中天景団關係法系図】



中天景団の現存作例を見渡したとき、その作品が妙心寺山内に三点伝来していることに注目される。このうち頂相作例は、妙心寺塔頭大法院に伝来する①「淡道宗廉像」と妙心寺本坊に蔵される②「関山慧玄像」である。

①「淡道宗廉像」は大法院の開祖像であり、宝永三年（一七〇六）、林道祖桂の求めに応じて寧山良泰（愛知県名古屋市・政秀寺七世）が着賛する。なお、同寺には「華蹊」なる人物による副本が存在することをここに付け加えておく。副本は、文化十四年（一八一七）に證宗祖明（妙心寺四五二世）が寧山の賛文を書写する。

一方、②「関山慧玄像」は、妙心寺開山である関山慧玄の現存最古の頂相として知られる雪江宗深賛「関山慧玄像」（文明二年・一四七〇年賛、妙心寺）の副本として妙心寺に伝来するものである。本画像は、昭和十年（一九三五）に上梓された『妙心寺六百年史』の巻頭にて初めて紹介された<sup>26)</sup>。しかしその後は、加藤正俊氏が本画像の存在に言及されるにとどまり、これまで紹介される機会が少なかった画像である。賛文は黙雲禪宜（妙心寺二六八世、埼玉県新座市・平林寺八世、一六四八―一七三〇）が雪江のそれを書写する。その末尾に「正徳五年乙未李夏日 現四住当山黙雲禪宜／焚香九拜謹写于見麼軒」の款記があり、正徳五年（二七一五）、妙心寺四住の際に見麼軒にて書写したという。黙雲禪宜は、この年の秋頃には妙心寺住持職の任期を終えて平林寺へ帰山したようである。<sup>28)</sup>

なお、妙心寺には本山（本坊）の日単とも称すべき『記録』と題された資料が蔵されている。その『正徳五乙未歳 記録 第二十四』の六月三日条に、「総評之次副寺披露ニ云先達テ上方「黙雲／和尚」エ御頼被成ソロ 開山尊像讚ノ写致出来ソロ間衆座エ宜頼入ソロトナリ即日以副寺謝勞」とある。正徳五年六月三日、かねてより黙雲に依頼していた開山（関山慧玄）像の賛文の書写が出来上がった旨を書き留めている。ここにおいて注目されるのが、本画像の依頼主が本山（副寺寮）であることである。すなわち、本画像が妙

心寺派寺院（末寺）あるいは妙心寺の宗風を慕う帰依者からの寄進によるものではなく、妙心寺が発注した妙心寺公式としての開山像の副本であることがうかがえる。しかし、制作直後、妙心寺において開山遠諱などの法会が執り行われてはおらず、如何なる目的で本画像が制作されたのか、その背景は詳らかでない。この六年前には開山三五〇年遠諱が厳修されており、本画像も三五〇年遠諱事業の一環としての制作であろうか。

いずれにしても、①「淡道宗廉像」と②「関山慧玄像」は、ともに開山像として重要な作例である。中天景団の名は妙心寺派内において著名であったものとおもわれ、その存在は妙心寺派における頂相制作を考える上で看過することはできない。

中天景団が描く頂相は、③「東法純季像」を含め、頂相制作の通例に倣って描かれている。袈裟や法被は色鮮やかな彩色が施されており、衣文描写は微細である。禅僧であるものの絵師としての高い画技をうかがうことができる。その画技の高さからは専門画僧的な活動が想定される。

その点、頂相以外の作例である④「布袋図」や⑤「四睡図」の存在にも注目したい。④「布袋図」は白隠下の禅匠として名高い良哉元明（一七〇六〜八六）ゆかりの禅刹である花岳寺に伝来する。上部には、良哉が賛文を賦しており、三河の地にあり、同時代を生きた二人の禅僧による作品として興味深い。⑤「四睡図」は妙心寺塔頭麟祥院に伝来するが、同寺におさめられた経緯などについては明らかでない。④「布袋図」は室町水墨画の伝統的な布袋図の図様に倣って描かれる。その筆法からは、狩野派の要素を看取することができる。狩野派作品、もしくは実際には同時代の狩野派絵師に学んだ可能性が認められる。このことは、⑤「四睡図」の存在によっても裏付けられ、古画にも通じ筆法を使い分ける技術も兼ね備えていたようである。中天景団が伝統的な画題をも描いていたことを知る貴重な作品である。



なお、④「四睡図」の款記に「山月堂」とあり、本作品をおさめる箱の蓋表には「四睡図 山月堂画 一軸」と墨書される。これにより、中天景団は「山月堂」と号したようである。さらに、③「東法純季像」には「景団」（白文方印）とともに「雪獅叟印」（朱文方印）と判読できる印が捺されており、「雪獅叟」とも号していた可能性が認められる。現存作例および妙心寺関係資料の記述を勘案すると、活躍期は十七世紀後半から十八世紀前半頃と想定できよう。

### おわりに—今後の課題—

本稿においては、近世の妙心寺派寺院において頂相制作を行っている水谷憬南および中天景団という二人の絵師を取り上げ、作品各個の詳細な考察までにおよばなかったものの、論者が確認することができた作例を紹介した。現存作例の数に加え、京都のみならず全国の妙心寺派寺院のために制作活動を行っていることが注目される。さらに、形式化の一途を辿っていた江戸期の頂相制作において、一際目を引く高い画技がうかがえる。その点、実態解明が待たれる優れた絵師ではあるが、数少ない資料による画業の復元は困難であるのが現状といえよう。

両者の作品は、すでに全国各地にて確認できることからして、今後、さらに相当数の作例が広範囲にて見出される可能性が高い。このうち水谷憬南は、妙心寺派寺院のみに作画活動が限られていたとは考え難く、妙心寺派寺院以外でも作例が確認されることを期待したい。また、水谷憬南の作品は頂相作例のみにとどまるが、仏画をはじめとする多岐にわたる領域の作例を遺している可能性も見込める。中天景団においても水谷憬南と同様、さらに全国にて作例が見出されよう。両者の作例および関係資料が見出されるのを期待しつ

つ、現存作例の印章整理および作品の編年作業を今後の課題とし、その実態解明と画業の復元を試みたい。

また、最後に付け加えておくならば、妙心寺および妙心寺派寺院にて、器外古璉（京都府京都市・大心院一五世）が描いた寧山禅慧賛「関山慧玄像」（江戸時代・十九世紀、京都府京都市・妙心寺）および春澤嵩拙賛「延陵不珣像」（文政十年・一八二七年、山梨県甲州市・恵林寺）、円水宜応（静岡県静岡市・心光院六世）による頑海慈湛賛「渭川周瀏像」（明和三年・一七六六年、東京都文京区・麟祥院）および頑海慈湛賛「義山全應像」（明和五年・一七六八年、東京都文京区・麟祥院）<sup>31</sup>の存在をこれまでに確認することができた。器外古璉と円水宜応は、近世における妙心寺派僧であり、円水宜応については中天景団と活躍期を同じくする可能性が高い。これらの作品により、中天景団以外にも妙心寺派僧が頂相を制作していたことが明らかである。したがって、中天景団のみならず、頂相画家としての一面をもつ禅僧の存在にも着目し、作例の収集および行状と画業の解明が必要であると考えている。

本稿において紹介した水谷憬南および中天景団の現存作例により、近世妙心寺派における頂相制作のネットワークの存在が示唆される。水谷憬南および中天景団のみならず、頂相画家としての禅僧や、妙心寺絵所の存在をも視野に入れた広い視点での考察をすすめていきたい。近世妙心寺派における頂相の研究が、当該期の妙心寺派の動向と、全国に張り巡らされたネットワークの解明の糸口となり得ることを期待し、今後に残された課題に取り組んでいきたい。

《図版》

安禪宜泰像

普山祖宰贊

水谷憬南筆

(岐阜県大垣市・大勝寺)



安禪宜泰像 印章



關山慧玄像

默雲禪宜贊

中天景因筆

(京都府京都市・妙心寺)



關山慧玄像 印章





四睡图

中天景团笔

(京都府京都市・麟祥院)



四睡图

落款



《注》

- (1) 東京国立博物館・京都国立博物館・読売新聞社編『開山無相大師六五〇年遠諱記念 妙心寺』（東京国立博物館・京都国立博物館・読売新聞社、二〇〇九年）
- (2) 特別展「妙心寺 禅の心と美」実行委員会編『開山無相大師六五〇年遠諱記念 妙心寺 禅の心と美』（特別展「妙心寺 禅の心と美」実行委員会、二〇〇九年）
- (3) 九州国立博物館編『開山無相大師六五〇年遠諱記念 京都 妙心寺 禅の至宝と九州・琉球』（西日本新聞社、二〇〇一年）
- (4) 京都国立博物館編『室町時代の狩野派―画壇制覇への道―』（京都国立博物館、一九九八年）、山本英男『初期狩野派―正信・元信―』（日本の美術）四八五、至文堂、二〇〇六年）、同「妙心寺と狩野元信」（前掲注（1）東京国立博物館・京都国立博物館・読売新聞社編『開山無相大師六五〇年遠諱記念 妙心寺』）
- (5) 花園大学歴史博物館編『大圓寶鑑國師三五〇年遠諱記念 大仙寺展』（花園大学歴史博物館、二〇一二年）
- (6) 大西芳雄「東照宮御本社御内陣の絵師木村了琢について」（『MUSEUM』二三七、一九七〇年）、同「絵仏師木村了琢―東照宮深秘の壁画について―」（『東京国立博物館紀要』一〇、一九七五年）
- (7) 徳応と貞綱（徳栄）に関する主要文献は、秋山光和「平等院鳳凰堂絵画の研究」（『平等院大観 第三卷 絵画』岩波書店、一九九二年）、同「絵所左京徳悦の画業と後継者左近貞綱徳栄」（東寺〔教王護国寺〕宝物館編『修理完成記念 東寺の十二神将像―モデリングの妙―』東寺〔教王護国寺〕宝物館、一九九八年）、濱田直嗣『東北の原像―美の風土と人の文化誌』（創童舎、二〇〇一年）、仙台市博物館編『武家と禅―伊達氏とみちのくの禅宗寺院―』（仙台市博物館、二〇〇三年）、福岡市美術館編『近世の絵仏師展』（福岡市美術館、二〇〇四年）、樋口智之「絵仏師徳応・貞綱の肖像画制作について―瑞巖寺僧関係作品を中心に―」（『仙台市博物館調査研究報告』二五、二〇〇五年）、渡邊雄二「萬福寺の涅槃図の作

者徳心について」(『黄檗文華』二二五、二〇〇六年)、門脇むつみ「近世の絵仏師「徳悦、徳心、貞綱(徳栄)」の肖像画制作」(『鹿島美術研究』(年報第三二号別冊)、二〇一五年)

(8) 西村恵信『東嶺和尚年譜』(近世禅僧伝 八、思文閣出版、一九八二年)【五頁・挿図】

(9) 花園大学歴史博物館編『湯島 麟祥院 春日局と峨山慈棹』(花園大学歴史博物館、二〇一六年)【作品番号16】

(10) 前掲注(5) 花園大学歴史博物館編『大圓寶鑑國師三五〇年遠諱記念 大仙寺展』【作品番号41】

芳山祖海(？)一七六六)は大仙寺一三世、普山祖宰は慈溪寺(岐阜県大垣市)五世

(11) 『慈雲山福聚寺所蔵品目録―慈雲山福聚寺歴史資料調査報告書―』(久留米市文化財調査報告書 第二十二集、久留米市教育委員会、一九八〇年、前掲注(3) 九州国立博物館編『開山無相大師六五〇年遠諱記念 京都 妙心寺 禅の至宝と九州・琉球』【作品番号84】

古月禅材(二六六七―一七五二)は大光寺(宮崎県宮崎市)四二世・福聚寺(福岡県久留米市)開山、翠巖從真(二六八三―一七七二)は大光寺四三世

(12) 安禅宜泰は大勝寺三世、普山祖宰は慈溪寺(岐阜県大垣市)五世

(13) 花園大学歴史博物館編『東嶺圓慈 禅画と墨蹟 龍澤寺・齡仙寺と近江の禅寺所蔵作品』(花園大学歴史博物館、二〇一二年)【作品番号3】

東嶺圓慈(一七二二―九二)は龍澤寺二世

(14) 前掲注(13) 花園大学歴史博物館編『東嶺圓慈 禅画と墨蹟 龍澤寺・齡仙寺と近江の禅寺所蔵作品』【作品番号4】

千歳祖鈞は齡仙寺四世、東嶺圓慈(一七二二―九二)は龍澤寺二世

(15) 前掲注(13) 花園大学歴史博物館編『東嶺圓慈 禅画と墨蹟 龍澤寺・齡仙寺と近江の禅寺所蔵作品』【作品

番号5)

吳巖義喬は齡仙寺五世、東嶺圓慈(二七二〜九二)は龍澤寺二世

- (16) 花園大学歴史博物館編『滅却心頭火自涼 甲斐の名刹・恵林寺の至宝』(花園大学歴史博物館、二〇一四年)【作品番号21】

古林義発(二七五〜七八)は恵林寺四五世、月船禪慧(二七〇二〜八二)は高乾院(福島県田村郡三春町)二一世

- (17) 前掲注(8) 西村恵信『東嶺和尚年譜』

- (18) 花園大学歴史博物館編『大法院展 真田家と佐久間象山ゆかりの文化財』(花園大学歴史博物館、二〇一〇年)【作品番号1】

淡道宗廉は大法院開祖、寧山良泰は政秀寺(愛知県名古屋市)七世

- (19) 大本山妙心寺編『妙心寺六百年史』(妙心寺開創六百年記念・雪江禪師四百五十年遠諱大法会局、一九三五年)【巻頭口絵】

関山慧玄(一二七七〜一三六一)は妙心寺開山、黙雲禪宜(一六四八〜一七三〇)は平林寺(埼玉県新座市)八世

- (20) 前掲注(16) 花園大学歴史博物館編『滅却心頭火自涼 甲斐の名刹・恵林寺の至宝』【作品番号19】

東法純季(二六六四〜一七三二)は恵林寺四二世、古月禅材(二六六七〜一七五二)は大光寺(宮崎県宮崎市)四二世・福聚寺(福岡県久留米市)開山

- (21) 志水一行「表紙解説」布袋図 良哉元明賛・中天景团筆」(『禅文化』二二六、二〇一五年)

良哉元明(二七〇六〜八六)は花岳寺五世

- (22) 花園大学歴史博物館編『妙心寺麟祥院所藏絵画資料目録』(花園大学歴史博物館資料叢書 第一輯、花園大学歴史博物館、二〇一一年)【作品番号38】

- (23) 妙心寺派宗務本所総務部編『昭和改訂 正法山妙心禅寺宗派図 別巻一 総索引 人名簿』(妙心寺派宗務本所、



一九七七年

(24) 妙心寺派宗務本所総務部編『昭和改訂 正法山妙心禪寺宗派図 三 龍泉派下景堂門派』(妙心寺派宗務本所、一九七七年)

(25) 前掲注(24) 妙心寺派宗務本所総務部編『昭和改訂 正法山妙心禪寺宗派図 三 龍泉派下景堂門派』

(26) 前掲注(19) 大本山妙心寺編『妙心寺六百年史』

(27) 加藤正俊『関山慧玄と初期妙心寺』(思文閣出版、二〇〇六年)

(28) 玉村竹二・葉貫磨哉『平林寺史』(平林寺、一九八七年)、埼玉県立博物館編『特別展 平林寺』(埼玉県立博物館、二〇〇三年)、花園大学歴史博物館編『武蔵野の禅刹 平林寺―伝来の書画名宝展―』(花園大学歴史博物館、二〇一五年)

(29) 前掲注(16) 花園大学歴史博物館編『滅却心頭火自涼 甲斐の名刹・恵林寺の至宝』(一三〇頁・恵林寺所蔵

頂相)

(30) 前掲注(9) 花園大学歴史博物館編『湯島 麟祥院 春日局と峨山慈棹』【作品番号8】

(31) 前掲注(9) 花園大学歴史博物館編『湯島 麟祥院 春日局と峨山慈棹』【作品番号14】